

オランダ辞書の編集

〈諸藩の洋学と中津辞書〉

二豊諸藩では、江戸時代中後期から世界的視野に立って、西洋の知識を吸収しようとする動きが活発となり、藩校教育に洋学が取り入れられた。また、積極的に洋学を研究する学識者も現われた。

洋学の学科を置いたのは、進脩館(中津)、修道館(岡)、学習館(杵築)、致道館(日出(ひじ))の4藩である。中津藩では、藩主**奥平3代昌鹿**が**前野良沢**を庇護して蘭学の研究に当たらせた。また、**奥平5代昌高**は、進んで蘭学者を招いて海外事情を聴取したと伝えられ、「**蘭語訳撰**」、「**バスタード**」の2辞書を編纂した。この2本を中津辞書という。「蘭語訳撰」は文化7年(1810)、後者は文政5年(1822)に江戸で刊行された。

「**蘭語訳撰**」は中津藩士**神谷弘孝**(かみやひろよし)が選著し、幕府天文台に勤務するかたわら蘭学を教えた**馬場貞由**の校閲、藩主昌高が監修した日蘭対訳辞書である。収録の語数は7,072語、天文 地理 時令 数量 宮室 人品 家倫 官職 身体 神仏 器用 衣服 飲食 文書 錢穀 采邑 人事 動物 植物の19項目にわたり、当時、この種の辞書としては最も充実したものであった。

「**バスタード**」辞書は蘭日対訳辞書である。前野良沢門下の英才**大江春塘**が著述し**馬場貞由**が校訂、藩主昌高が監修した。舶来していたメイエル辞書のバスタード部を日本語に訳している

(辛島詢士『中津辞書の穿鑿』)。

〈学識者と洋学〉

中津藩蘭学者**前野良沢**は、明和6年(1769)、青木**昆陽**(こんよう)に会って蘭学研究の勧奨を受け、翌7年、藩主昌鹿の許可を得て長崎に遊学、蘭語若干の習得と「人身内景図説」を入手して帰藩した。同8年、藩主に従って上府、このとき、**杉田玄白**(げんぱく)らとともに人体解剖を実見して「**ターフルアナトミヤ**」の翻訳を決意、安永3年(1774)、苦心の末に「**解体新書**」を完成した。以後、蘭書の翻訳 研究に努め、その足跡は語学 医学をはじめ、天文 地理など広範に及んだ。蘭学を修める儒学者も出るようになる。

文政元年(1818)のころ、**帆足万里**は蘭学の必要性を痛感して蘭書を収集し、研究に精励する。当時、幕府の蕃書調所は16種類の蘭書を備えていたが、万里はこのうちの13種類を所蔵していたという。畢生の著『窮理通(きゅうりつう)』は、抜群の蘭語学力とこれらの蘭書研究の上に成り立ったのである(帆足図南次『帆足万里』)。万里門下の**勝田季鳳**(きほう)は上洛して**藤林普山**(ふざん)に蘭学を学んだ。**三浦梅園**も延享2年(1745)以後、再度、長崎に赴いて地動説の知識や天文 地学の新説を聞き、天象図 寒暖計 望遠鏡 天球儀 地球儀 羅針盤などを見て新知識を得ている。長崎行の中に、西洋の学説を質して自説を確かめようとする意志を見ることができる。**広瀬淡窓**も**咸宜園**(かんぎえん)の学科に蘭学を取り入れている。文政6年、シーボルトがオランダ商館医として来日すると、翌7年、二豊からその門に入る者があいついだ。中津藩の医師**村上玄水**もシーボルトの**鳴滝塾**に入門して研鑽を積んだ。高野**長英**らが同門であったという。

2年を経て帰藩、典医となった。文政11年、シーボルト事件が起こると、高野長英は幕府の追求を逃れて中津藩**村上玄水**邸に隠れた。居ること40余日であったと伝える(『大分県人物志』)。速見郡南由布村(湯布院町)の**日野鼎哉**(ていや)もシーボルトに就いて蘭学を学んだ。のち、京都において医者を開業、蘭語に通じ外科に絶妙な手腕を振ったので、その技は大坂の**緒方洪庵**とともに世に喧伝されたという。国東郡高田(豊後高田市)の**賀来佐之**(かくすけゆき)もシーボルトに就いて蘭方 本草学を学び、杵築において医業をつづけた。本草学の**賀来飛霞**(ひか)は、兄佐之に大きな影響を受けた。宇佐郡高並(たかなみ)村(院内町)の**大井憲太郎**は、万延(1860~61)のころ、長崎に遊学してシーボ

ルトらに就いて蘭学を修めた。のち、大坂に出て洋文 漢籍を教えたが、さらに英語研究を志して江戸に赴き研鑽を積んだ。

慶応2年(1866)のころ、幕府洋学館開成所に勤務したが、明治になって自由民権運動に身を投じた。中津藩の福沢諭吉は、安政元年(1854)、長崎に遊学して蘭書を学び、翌2年、大坂に赴いて緒方洪庵の適塾に入門、塾頭にまで進んだ。同5年、江戸鉄砲州(ず)藩邸に蘭学塾を開いて藩士子弟に蘭学を教え、かたわら、英学を研修して英学者となった。文久元年(1861)、幕府が英 仏などに使節を派遣するに当たり、随員となって渡洋、慶応2年、このときの見聞を「西洋事情」に著し、国民に対して世界に目を開かせる役割を果たした。同4年、鉄砲州蘭学塾を新銭座に移して英学塾とし、慶応義塾(慶応大学の前身)と称した。明治4年(1871)、廃藩置県後、諭吉は旧藩主奥平昌邁(まさゆき)に勧め、奥平家の家禄の一部を支出して中津市校(しこう)を設置させた。教育方針や学規が中津出身の慶応義塾教授中上川彦次郎らの協力で制定され、本科は英語専修、別科は翻訳書によって西欧諸学科を修める洋式英学校となった(『大分県教育百年史』)。この開校を祝して起草されたのが『学問のすすめ』である。

参考文献 『大分県人物志』